そこへ行くと朝鮮の寺院では、大きな重要建築には初めから支柱を入れてある。勿論形も八角形に削り、下太く上細く、下には蓮瓣を刻した礎石を置き、柱頭も何かを彫刻して飾った上に、支柱全體も其建築と共に極彩色だから、支柱は別に支柱として見えず、本建築の一部の如くであり、ただでさへ隅で反りの多い軒は、いつ迄も形が崩れず、意氣揚揚いつも颯爽たる英姿で伽藍の中心たるに充分の貫祿が備はってゐる。内地の支柱入を老人の杖にたとへた筆法から行けば、好個の紳士がステッキを持ってゐる如くで、其形態は申分がない。

以上が前置で話はこれからである。最近私が少しばかり關係してゐるところのある木造純日本建築は、大分大規模のもので軒の出も可なり多いから、設計をしてゐた昭和十一二年の頃は、勿論銅瓦を以て葺くつもりでゐたのに、時局の關係で銅の使用が禁止せられたため、土瓦に變更をしたものの、既に雨落溝もできて了ってゐたので、無理をして軒の出を引込めてみたところで、溝迄動かす事は不可能だし、小屋組へ木材を入れて補强してみても、軒の垂下を防ぐ事は到底出來ない。而も瓦を以て葺き上げると同時に垂下を始め、落成式の頃は、横からみると軒が何れも唐破風の樣に見えるだらうと思はれた。實は「だらう」ではなくて「だ」といった方がいい位である。併し素人はさうなるのが當然とは考へず、工事に關係した我我がぼんやりしてゐるからだといふ風に、四方八方から非難攻擊を受ることは火を見るより明らかである。

内地では非常に珍らしい例だが、大傳法院多寶塔*上層四隅の支柱は、今の塔が建てられた當初から入れてあるので、四隅が下がって來てから入れたのではない。外地の大寺の大きな堂の四隅に、裝飾支柱を入れたのが多いのは、既に

*通稱「根來の大塔」（ネゴロノダイタフ）といふ。和歌山縣那賀郡根來村大字西阪本、大傳法院境内にある。高野山根來大塔の型式を傳ふるものとして頗る有名。室町時代。

述べた通りである。私は夫等を例に引いて、建築をいつ迄も端正な形に保つため、下らぬ前に裝飾支柱の挿入を勸告した。所が最初は少しばかり難色があったが、幸に賢明な當局の諒解を得て實行する事になり、大に安心する事ができた。誰よりも先に初めて何事でも試みるのは、相當の勇氣が必要である。こんな事をしては笑はれるかも知れない等と思ってゐては、いつ迄たっても駄目である。改良なんか思ひもよらない。

蛇腹にしてもさうである。あの樣な燒物をあの樣に使へば、再三記した樣に唐樣の氣分が實によくでる。唐樣だからいいが、和樣や天竺樣はこの調子には行かない。併しそこは何とか工風をすれば、そんな感じをだす事ができないこともあるまいが、これ等は大分むづかしい樣である。褒め過ぎかも知れないが、とにかく朝鮮ホテルはよくできてゐる。蛇腹ばかりではないすべてよろしい。

（昭和十八年三月十九日稿了）

忠靈塔計畫圖

今では最早はっきりしないが、昭和十七年の三月のある日であったと記憶してゐる。京都市役所からMさんとKさんとがおいでになり、今度京都市に忠靈塔が建つことになったに就いては、設計萬端よろしく賴む、若し懸賞設計にする方がよければ、其手續をする。何れにしても總て任せるからとあった。塔にもいろいろの種類があり、佛塔ならいくらか研究もしてゐますから、やれとおっしゃればやりもしませうが、忠靈塔は困ります。あれは型式がきまってゐるのではありませんか、と申したところ、場所が京都だから京都に似合ふ樣なものを希望するのだから、そんな事を言はずに是非引受ろとあって、とうとう何とかすることになった。

然らばできるかできないか、マアやって見ませう。京都へ建てるのなら、私は純日本式でなくてはいけますまいと思ひますといふ樣なわけで、自信はないが試みることにした。そこで私が絶對に信賴してゐるO君が、丁度ひまになってゐたので、同君に製圖をして貰ふことにした。私の氣持を最もよく呑み込んでゐるから、思ふ通りの形を描くし、見積りの方では、其方面に精通してゐる上に、多年の經驗で間違のない最適者であるからである。準備のため相當の日がかかったので、實際圖を引きだしたのは五月頃からであったらうか。其平面は依賴者側の原案通りとし、其樣式は各時代の建築細部の粹を採った和樣建築とし、やっとでき上ったのは八月初であったかと思ってゐる。

此忠靈塔の設計製圖上の便宜は、すべて市役所で與へてくださった。營繕課のG技師は萬事斡旋の勞をとられ、漸くでき上った配景圖は、寫眞にとって新聞紙へのせ、「でき上り想像圖」といふ長い名の見出をつけ、新忠靈塔は平安神宮を模したものとかいふ樣な文句もあった。屋根と軒とに反りのある軒の出の深い、綠や丹で塗った謂はゆる「丹楹青鎖」の建築は、素人が見たら何れも同じに思はれ、區別をつけられないのであらう。而も現在の平安神宮の建築に

は鴟尾が上って居り、忠靈塔の附屬建築にもある。其上に軒も反り上ってゐる。平安神宮に似てゐると思ひ、夫は模したに違ひないと考へたのであらう。よく確めもしないで、想像で斷定するのはよくない。昔の大極殿を推定復原した建築の眞似をしたのでは、昭和時代の忠靈塔にはならない。

とにかくこの設計圖は、八月末に關係者一同の承認を得たには得たが、後に材料の關係や何かで廢案となり、肝心の塔をやめて忠靈堂の樣なものとし、屋上に小型の寶塔をのせることにして、新に計畫をし直した。これは餘程考へたつもりで、O君も隨分骨を折ってくれ、無事にでき上ったので再び新聞紙に配景圖が現はれた。私は當時用事のため東京へ行ってゐて、まるで知らなかったが、歸って來て人からきかされ、古新聞紙を出して初めてみた（二月二日の新聞紙）。一つのには「國粹床し多寶塔式」といふ見出しだが、これは屋上大棟の交叉點に「寶塔」を置いたのを「多寶塔式」としてしまったのである。もう一つのは說明中に「やや小さいコンクリート製寶塔（やはり佛教の樣式を加味）を屋上に頂く……」としたのは、この小塔をコンクリートでつくるのではないつもりだから、これは誤りとしても、寶塔としたは正しい。しかし其後に「建物の樣式は從前通り平安神宮に似通ったもの」とあるのがいけない。素人の認識不足が、復もや勝手に平安神宮式と思ひ込んでしまったのである。

曩に記した通り、かういふ風な建築は、別に平安神宮でなくとも、古い時代の建築樣式によったのだから、互に似通ふのは當然である。A＝B, B＝C. ∴A＝C といふのは代數の習ひ初めに學ぶところで、これと同じ理窟である。平安神宮は古建築の樣式をもってゐる。忠靈塔も古建築の樣式をもってゐる。然らば忠靈塔も平安神宮も、似てゐるところがある筈で、似通ってゐなければ餘程どうかしてゐるのである。平安神宮は明治二十七年か八年頃できたので、

今日からみれば細部に時代錯誤の點がある。似通った位ならいいが、そんなところを知らずに模しでもしたから工合がよくない。

尙ほ又、眞似をしてゐたのでは、いつも決して原物以上には出られるものでないといふ事を銘記すべきである。暗示を得るのは別である。のみならず、何か元になるものがなければ、何もないところからめったに人を驚かす樣な獨創的意匠は出てくるものではない。古いものを參考にする事は必要だが、眞似をする事は絶對禁物である。金持が何かつくらうとする時、自分の信賴する職人をどこかへやり、其目的に副ふ樣なものを見させ、夫を模して造らせたりする樣だが、凡そ世の中にこの位下らない無意味な事はない。結果は幼稚極るものができ、徒に識者の嗤を招くのが落である。

（昭和十八年三月十九日稿）

英語唱歌

事聊か舊聞に屬するが、新聞紙の報ずるところによると、唱歌の譜等も敵性國家のはやめにして、新しく日本調子のものにしなければいけない。例へば昔から親まれた卒業式の時の歌である「螢の光」等は、其譜が外國のものだから、何か他に代るものにすべきだが、今年は間に合はないから其儘にして、來年は新しい歌をつくるとあった。

私が小學校の生徒の頃、唱歌なるものが初めて正科に入り、學校の教室で大きな聲を出して歌をうたふ樣になった。夫は明治二十年で下野の宇都宮市に居た時のこと。公立小學校がたしか東校と西校と二つあり、私は東校の生徒であって、勿論そんな時分にそんな事を知ってゐよう筈もなかったのは述べる迄もないが、正和元年八月在銘の鐵塔婆で有名な清巖寺の正門から入り、本堂の前を左に曲り、墓地をぬけて學校の運動場へ出で、歸りは其逆で毎日通學したものだ。東京から引越して來て入學した時は中等科三級であったのに、在學中大試驗（其頃は小試驗と大試驗とに分れて居り、大試驗が今の學年試驗に當ってゐた）があり、びりっこけでやっとこさ及第したら、中等科二級になるべきのが、高等科三年になったと記憶してゐる。

唱歌は中等科三級の時に初めて教はった。最も單純なので、「アガレ・アガレ・ヒロノノ・ヒバリ」といふのであった。こんなのから始めて、遂に「螢の光」まで漕ぎつけた。唱歌は小倉さんといふ女の先生が教へてくださったので、歳は十六といふ噂であった。私は當時數へ歳十二であったから、子供心にもあの先生は自分よりたった四つ上か、若い先生もあるものだと思ったが、小倉先生はこれは大變にいい唱歌だから、よく覺えなければいけませんとて、何度も練習させられた。なぜいい歌なのか、どこがいいのか、何も判らずに一生懸命で歌ったものだ。宇都宮へ住んでゐたのは僅か一年間に過ぎなかったが、山へ貝の化石を掘りに行ったのや、ハッチョウトンボ、ツノトンボ、ヒオドシテフ等を採集したり、ヤツメウナギやカヒエビを初めて捕へて、驚異の眼を睜ったり

したのと併せて、螢の光と小倉先生のお若い姿とは、はっきりした覺えがある。先生が未だ健在ならば、小生が六十八歳だから、丁度今年は七十二歳でいらっしゃる勘定である。

高等科三年生の途中、東京へ歸る事になり、東校を退學して東京下谷の下谷小學校といふのへ入り、高等四年生の途中で下谷小學校を退學して芝へ移り、鞆繪小學校に入り、同校を卒業して中學校へ入った。中學校の二年生（當時は最下級を五級といひ、最上級を一級といった。二年は四級といってゐた）の時、正科だか隨意科だか何だか忘れてしまったが、唱歌が科目にあった。たしか一週に一度、上野の音樂學校から、小山正太郎先生がおいでになり、教へてくださったのは總て英語唱歌であったのである。

小山先生が最初に黑板へ Children go とかかれ、譜もｄｒｍｆ……を用ひたので、何のことか判らずにゐたところ、オルガンを引きながら、歌はれたのをきいたら、夫が當時の幼稚園唱歌集に載せてある「進め進め」であった。今の子供とちがひ、ド・レ・ミ・ファなんか中學生になっても全然知らなかったのだから、ヒ・フ・ミ・ヨ……がド・レ・ミ・ファで、「進め進め」が「チルドレン・ゴー」といふ事をはじめて知り、つまらなかったと同時に面白くなり、唱歌の時間が樂みで隨分待遠であった。其他「蝶蝶」にせよ「霞か雲か」にせよ、何れも英語唱歌であるので、教はるたびの感想は「ナアーンダ、これもか」といふ調子であったが、遂に「オールド・ラング・サイン」が「螢の光」の本家である事を知るに及び、あれも亦外國の歌であったのか、夫にしても「オールド・ラング・サイン」とは何の事か判らなかったままで過ぎたのであった。夫が Old long since といふ事で、つまり Long ago といふ意味であるのが判たのは、相當に大きな英語の字引が引けるだけの力がついてからであった。

明治の末から大正の初めにかけて、どうした風の吹き廻しか小泉八雲氏の著書を連りに讀んだものだ。其一に Gimpses of Unfamliar Japan といふのがあ

り、そのうちの From the Diary of a Teacher のなかの一節に

The little ones have learned the Japanese national anthem (*Kimi ga yo wa*) and two native songs set to Scotch airs, one of which calls back to me, even in this remote corner of the Orient, many a charming memory: Auld Lang Syne.

とあった。これは如何にもさうであったらう。嘗て私はソート・レーク・シチーのモルモン宗の本山へ參詣した時、本堂の奥にはパイプ・オルガンがあり、やがていろいろの音樂を奏しだしたが、其目錄のなかに An Old Melody といふのがあったので、何か知らんと思ってゐたら The Last Rose of Summer をやり出した。私はこの譜をきいた時に、原語の歌よりも「しらぎく」の歌を思ひだしたのであった。小泉八雲さんが「オールド・ラング・サイン」の譜で、日本の歌を子供が歌ふのをきかれた時の氣持はよく判った。

青い眼の人形をたたきつぶしたり、チャーチルやルーズの藁人形を陸軍記念日に棒で打ったりしてゐる今日此頃、いくら夫が明治二十年代で、日清戰爭より以前にせよ、中等學校で英語唱歌を敎へた事なんか、今の若い人にはとても考へもつくまい。嘘としか思はれまいが、これは確かに敎はったものが生き殘ってゐて、書いてゐるのだから誤りはない。本人にしてみれば今の世の中に、全く今昔の感にたへないのである。

（昭和十八年三月二十日稿）

講演筆記と見學案内

題名のつけ様がないのでかうしておいたのだが、この二つの間に何等の聯絡はない。實は原稿を渡して暫くたつ間に、拙者の講演筆記がある雜誌に載せられ、夫が手許に屆いたのを、讀んで見て大いに困ったのと、殆んど同時にある專門雜誌にでてゐた見學案内の書き方が、ひどいといふよりは寧ろなさけないので、このままにしておいては將來どんな亂暴な廣告が出ないとも限らない。若しその様にでもなるといけないから、拙者此際憎まれ者となり、一つ苦言を呈しておく事にしたのである。自分が年中間違った事ばかり書きながら、苦言なんか臍茶かも知れない。併し作家と批評家とは異なるので、拙者は今批評家の位置にゐるのである。

一、講演筆記

講演は、夫が純學術的のものか何かでない以上、つまり高級大衆向程度のものであれば、別に大した準備もなしに、前日參考書でも出して拾ひよみをする位ですむ。併し聽く方では珍しい話だといふ風に、大分買被ってくれる。夫が單に夫だけの其場限りですむ時はいいが、速記なるものを送って來て、一通り眼を通してくれとあった時、讀んでみるといつもきまって支離滅裂、何れは全部書き直さなければものにならない。なぜなら講壇で喋る時は話が前後したり、一つ事を二度言ったり、圖を描いて夫を指し、コレとコレとが等といふ時もあるのを、其儘速記されたのでは始末によくない。だから人の事は知らないが、拙者の講演に速記は無駄だから、いつもおやめなさいといふけれども、速記者のゐない時は先づない。

其速記を校正してくれといって、送ってくる時は、手間はかかるが誤りを少なくする事はできる。けれども稀には見せずに其儘雜誌等へ載せられ、如何に

も辛抱のできない、二進も三進も行かなくなる樣な場合もある。次に記すのは最近に起った一例である。

或時或男がやって來ていふには、「今日偶然本屋の店頭で何の氣もなしに手當り次第雜誌を見てゐるうちに、君の講演が載ってゐるのがあったから、一つ讀んでやれと思って、三十五錢奮發して買って來たよ」と。そこで雜誌の名をきいても、講演の題をきいても、小鼻に皺を寄せて笑ってゐるだけで始末によくない、だから言ふのがいやなら雜誌を見せろといったら、其男は怪訝な顏をして、「何だ、君んとこへは送って來ないのか、雜誌の名は忘れたから、ぢゃ此次持ってくらァ」といって歸って行った。

然るに其翌翌日、ある所からある雜誌が郵送された。まるで見た事のないものだったから、物珍らしく開いて繪等を見てゐるうちに、成程、拙者の話した事が登載されてゐた。これは困った、講演筆記をみてゐないのだから、どうか大きな誤りがなければいいがと念じつつ、早速ひと通り讀んでみたら、どうも何とも手のつけられない樣な誤りが、一つや二つでなく、夫以上もでて來たのには全く弱らされてしまった。

此講演の題は『堂塔建築に就いて』といふので、今年の一月大阪市のさる所で約一時間半喋った揚句、約三十分間幻燈を用ひて說明し、合せて二時間許を費したのであったが、其話のうちに、西大寺の弘安六年在銘の鐵製寶塔に觸れたが、後にさる未知の人から西大寺の寶塔といったのは、自分は多寶塔と心得てゐる。併し或は聽き違へであったかも知れない。その邊がはっきり知り度いといふ照會があった。萬一間違ふと申譯がないから念のため一應調べた上で、寶塔に誤りはない旨返事をしたので、この質問は落着をした。

何故にこの樣な照會がきたかといふに、寺ではあれを多寶塔といってゐるら

しい。現に目錄にはさうある。ところが拙者共は二重の場合を多寶塔と呼び、一重卽單層のものは寶塔といってゐる。先方は目錄を見て多寶塔と思って居られたのであらう。然るに拙者は目錄を見ず、實物を見て寶塔と思ってゐたので、これは雙方共誤りではなかった。

筆記をした人はこの位迄に注意が行屆いてゐたのである。だから全然信賴してゐたのにどうしたものか、大小取交せ大體左記の様な誤りがあった。

一。鎌倉時代に彫刻が殖えてきたといふ話の中に

……虹梁が平安時代のものでは、建物の隅の所で一本の柱の中へ入ってをりましたが、鎌倉時代になりますと、その先が出て來てをります。その突出部を木鼻と申します。そしてその先に何か彫刻がつきます。それも初めは簡單なものでしたが、室町時代に入って段段變化して、遂には象になったり、牡丹になったり、菊になったりしました……

とあるのは、初めに「例へば」とあればいいのに、夫がぬけたので木鼻は虹梁にだけのやうで、範圍が狹くなる。建物の隅の所から木鼻がでる例には、拙者は頭貫をとったのである。「一本の柱の中に入って居りましたが」もはっきり何の事か判らない。

二。サウリンタフの話をして、文字は「相輪樓」とかくと申したのに、何れも「相輪樓」となってゐた。辭書には「樓」「樓」同じ意で、又木偏のない「樓」も、何れもタウで同意らしいから、どれでもよささうだが、普通は「樓」を用ひてゐる。「エン」は「緣」がほんとうで、「椽」は音もテンで椎の事、緣を椽にするは誤りと、ちゃんと辭書にかいてある。拙者はいつも「エン」は「椽」字をかいてゐるが、相輪樓を相輪樓とする方が、これより理窟がある様である。併しどうも見馴れないせゐか、少しばかり變だ。

三。瑜祇塔の説明には

單層塔は瑜祇塔と申しますが、これは特殊の塔であります。相輪が五本あって、柱が八本ありますので五峰八柱と言ひます。而も之が池の中の金龜の上に立ってゐます。高野山に一基あるだけであり

ます。

とあるが、これは初めから間違ってゐる。單層塔は單層塔で、寶塔とはいふが瑜祇塔とは言はない。單層塔で相輪が中央と屋根の四隅に一本づつ、合せて五本あった時、他にも條件はあるが、先づ瑜祇塔といへるのである。其瑜祇塔では隨分苦しんだ事があった、といふのは其教義がさっぱり判らなかったからである。瑜祇塔は池があって、池の中に金色をした龜がゐて、其龜の背中から建ってゐるといふのは確かだが、其後に高野山に一基あるだけといへば、高野のがやはり龜背から建ってゐる樣にとれる。龜の背から建ってはゐないが、今の所高野山に一基あるだけといふ事なのである。

四。次は多寶塔の説明に移るので、つまり簡單な相輪樓を第一に、夫から寶塔、瑜祇塔、二重の多寶塔に進んで行ったのであるが、其話は

それから多寶塔は勿論相輪は一つで、下層平面は方形で上層は圓形であります。長押が入り、赤く彩色されて居り、庫裡門があります。面白いことに勝鬘院の多寶塔は、桃山時代のものでありますが、上の重は鎌倉時代、下の重はずつと昔から日本にある樣式から出來てゐます。但し下の重の窓だけは、上の重と同じなのであります。

となってゐる。此は相當に難解である。先づ第一に「勿論相輪は一つで」といふのは、普通の塔には多くの輪があるが、これには唯一輪といふ樣にとれるだらう。拙者は瑜祇塔には五本だが、これには寶塔と同樣に一本といったつもりである。「一」の下に「本」の字がぬけ「つ」の字が入ったのである。其次に「長押」や「赤い彩色」は何のために出て來たのか、恐らく何かの混入であらう。ここには不要な文字である。

其次の「庫裡門があります」に至っては、絶對に不可解である。强いて牽强附會すれば「九輪もあります」かも知れない。「クリンモあります」と書いたつもりが、急いだので「クリモンがあります」となってゐた。此を譯す段にな

って、筆記した人にも意味が判らないから、初めの方を「庫裡門が」としたのかと思はれる。果して然らば「が」は混入であらう。多寶塔に「庫裡門」は全く「困りもん」である。

勝鬘院の多寶塔が珍らしく下層は和様で、上層は唐様だといふ説明をしたが、和様だの唐様だの、平素聽き馴れない名は、やめた方がよからうと心得て、前記の様に話をしたのであるが、かう書いてあると「上の重は鎌倉時代からある様式からできてゐる」とはとりにくく、「上の重は鎌倉時代の様式より成ってゐる」様である。其上に「下の重の窓だけは上の重と同じである」も判然しない。下層脇の間の窓が盲花頭なので、あの窓の様式は上重と同じく、鎌倉以降ある式だといふ事をいったのである。

五。 四重塔が長野縣の植田の傍の別所といふ溫泉場にあるといふのも少し拙い。第一上田の傍では直ぐ近所――には違ひないが――らしいし、溫泉場にあるでは、何か浴客の遊覽地らしく、新世界かルナパークかあやめ池か淺草公園の様で、八角四重塔の隣りにメリ・ゴー・ラウンドや遊動圓木がある様な氣がしていけない。別所の安樂寺では一般に判りにくいと思ったから、別所は溫泉場として有名だが、そこの安樂寺といったのが、消えてなくなったのである。

六。 五重から九重迄は先づ大した事はないとして、次は十三重塔であるが、木造のが談山神社にある由を述べたのは正しいが、

……これは餘り古くはありません、享保五年ですから桃山時代であります。

も亦いけない。現在の塔は享祿五年の棟札はあるから、室町は確かである。「享保五年」は「享祿五年」の誤植とすれば桃山時代ではないし、「享保五年」が正しいとすれば江戸時代だから、やはり桃山時代ではなくなるし、どちらにしても工合がよくない。

以上は木造塔（相輪樓は木造ではないが）に就いてであり、次に石造塔の話をしたが、この内に金屬製の塔を含めておいた。夫で高野山の靈寶館にある金銅の小寶篋印塔の事を述べたが、筆記には

高野山の寶物院にある寶篋印塔は、寶永九年のものであつたと思ひますが……

とある。寶物院といふと、何だか塔頭寺院の名の様でなくもない。靈寶館を忘れたら寶物館の方がよからう。弘安十年六月二十二日といふ文字が――他にも多くの文字があるが――刻してある。十年を九年と心得て、うろ覺えで弘安九年のものと記憶すると申した其「弘安」を、「寶永」にして了ったのはどうした事か。鎌倉時代の石塔の話をしてゐる時に、江戸時代のものなんか例に引く筈はあるまい。

七。最後に結論になってからも、都合のよくない事が二つ書いてある。其一は奈良時代の塔の話のうちに、同時代に入ると東西二基の塔を建てる様になったが、平安へ移っても、やはり少なくとも初めの間は前代の式を追うてゐたらしい。其例として東寺をあげたが

……京都の教王護國寺卽東寺は、東塔だけあつて西塔はありませんが、南に入って右（東）に塔があり、左（西）に觀智院が建ってゐますが、そこが丁度西塔の位置であります。

となってゐた。このうち「南に入って」は「南大門を入って」の誤り。次に「左（西）に觀智院が建ってゐます」の「觀智院」は「灌頂院」で、若し西塔が建てられたなら、丁度あの邊になる由を述べたのである。筆記者は東寺のうちに有名な觀智院のある事を知ってゐたので、音も多少似てゐるし、灌頂院と混同してしまったのであらう。觀智院は北門外の東手に在る塔頭の一。灌頂院は東寺の法會中、最重要なる御修法を嚴修する建物である。此等は誤りのうちでも頗る重大といふべきである。

其二は平安時代の塔の話の中に

又、この時代の塔は堂と同じく石壇の上に建てられました。然し後世にもやはり昔の形式でやったものがあります。例へば東寺にある十三重の塔は、享祿五年（室町時代）のものでありますが、二重の石壇の上に建つてゐます。

とあるが、このうち初の方はいいとして、「例へば東寺にある十三重の塔」の「東寺」は「多武峰」の誤。東寺には十三重塔はない。六に指摘した多武峰の十三重塔は、享保五年の桃山時代として二重の誤りをしてゐるが、今度は享祿の室町は正しいが、東寺と多武峰とを混淆させてゐる。

此様な誤記をしながら誤記と氣づかず、速記錄を講演者に見せないで印刷に付し、讀者を誤って了ったのである。ほんの僅かの手數を省略したばかりに、讀者は何の事か判らないし、講演者は甚だ以て迷惑をするのである。

今年の四月にも次の様な事があった。或る新聞記者が來て、京都三條大橋の擬寶珠を回收されるさうだから、何か擬寶珠に就いて話してくれとあった。その時いろいろ話したうちに、胴にある「節」の數は、殆んど總てが三節で、四節も二節もあるにはあるが、ずっと少ない。そのうち二節のは稍や數も見出されるけれども、四節は割合に稀で、一節のものは四節よりも尙ほ少ない。無節のものは唯一例を擧げ得るのみである。といふ事をいったのであった。拙者は此等はすべて其記者の考へで登載するのだらうと推定したから、簡單な繪を描きながら、蓮蕾が擬寶珠で、開敷蓮花が卽唐樣勾欄親柱だといって說明をした。ところが案に相違して「擬寶珠は征く」といふ題名で、拙者の名が書いてあり、其記者がそばで私の描いてゐるのを見てかいたと思はれるなさけない擬寶珠の圖を入れ、終りのところに（談）とあった。これでは餘程氣をつけないと判ら

ない、さうして「節」に就いては

なほ…節もその數は一定してゐないが、三節のものが過半數を占め、次いで二節も多く、四節のものもあゐが、全然ないのも相當にある。

となってゐた。一節のものをぬかして了ひ、無節のものも相當にあるとなってゐた。夫なら間違はこれだけで、他は全部正しいかといふに、さうではないのであり、ただここには最も甚だしい誤りをのせたのみである。

一度ある雜誌の隨筆欄へ書いたから、ここには極くかひつまんで書くが、ある時ある英文雜誌に登載するから、□□□寺の五重塔に就いて原稿を日本文で書いてくれ、刪れたものに英譯させ、登載の前に一度見せる。或は英文で書いてくれれば一層よろしいといふ樣な事を賴まれた事があった。英文を書くなんか苦手中の苦手だから、勿論日本文で書いて約束通り期日迄に書留郵便で送ったが、確かに着いたかどうか其後杳として消息を絶ち　忘れた時分に活字で刷られた美しい雜誌が屆けられた。印刷の前に一度見せるといった約束なんか、守られると思ってゐたのは餘程おめでたかった事が判った。

扨て夫を一讀してみたが、何ともひどい誤譯が多かった。其中で最もひどいのは譯者の便を圖り、簡單な圖を多く入れておいたが、その一つに「木鼻」を圖解し、「木バナ」と記入しておいたのを、譯者は「ホバナ」とよみ、羅馬字で「Hobana」としてあった。これ等は其他の誤りと一所に正誤表でもつけて貰ふべく、幹部迄申込んでみたが、返事は至極よかったけれども、一つも實行されず、遂に泣寢入になって了った。

何ぼ何でもこれでは困るので、今度若しこの樣な場合には、最初に條件を提出すべく考へてゐた所、其後東京で發行してゐるある英文雜誌に日本の塔の事を書いてくれといふ交渉があった。引受ける條件として、譯した原稿を登載の

前に必ず見せて貰ひ度いと申込んで承諾を得た。併しそれは初稿が送られたので、一讀して訂正條項を日本文で記入し返送をした。さうしたらもう一度見せるといふ事で再校が送られた。併し記入の文字の意味が通じなかったか、思ふ通りには直ってゐなかった。そこで今度は十分に判る樣に記入訂正を試みて返送したが、夫は遂に間に合はず、雜誌は發行されたが、要求した拔刷には其内のある部分だけ訂正されてゐた。此等は餘程親切といふべきである。

最近六月の下旬にある所である事に就いての座談會があった。拙者もある人の勸誘により、何も判らないが樂友會館の夕食が戴けるので、出かけて行って席末に連った。蚯蚓や沙蠶ではめったに釣られないが、餌がよければ直に食ひ付くのが當世である。ところが此座談會の筆記を何かに出すのに、一度前以て見せないでもいいかといふ話がでた時、言下にK教授は「夫は是非見せなければいかん。先日よそで蒙古の話をした時、講演筆記を僕に見せないで印刷して了ったので、大間違があって實に弱った」と言はれたのでみると、こんな目には誰でも少なくとも一二回はあってゐるのだらう。K教授の說には拙者も大贊成で、早速尻馬に乘って贊意を表しておいたら、數日後廻って來た。一讀して早速朱を入れたら、殆んど全部朱色になって了った。こんな有樣だから、世間でもいい加減に見てゐるだらうから、大して心配しないでもよささうではあるが、何としても困る事は困る。

要するにいくら速記者でも、或は筆記の早い人でも素人は素人である、だから專門家には及ばない。自分では一つもぬかさずに書いたつもりでも、又誤らないつもりでも、さうはいかない。だから講演筆記等、ある程度迄精確を期さうと考へるなら、いくら面倒でも手續を省略してはいけない。必ず一度は其人に見せるべきである。堂塔に就いての筆記は右に指摘した位でたらめが書いて

あったればこそ、最初雜誌の話をして行った男が、何をきいても小鼻に皺をよせて輕蔑笑ひをしてゐたのは、如何にも尤も千萬である。かうなれば一層の事、多寶塔に庫裡門があったりする樣な、誰にも判らない謎の樣な判じものの樣な記事の方が、罪がなくていいかも知れない。

二、見學案内

拙者は今ここに珍無類な、世にも稀なる見學案内を紹介する。夫は古建築の見學で、さうして其案内文の出てゐるのが、堂堂たる建築專門の雜誌だから、實は開いた口が塞がらないのである。

素人考へでは、苟も建築を專門にしてゐる以上、病院だらうが銀行だらうが、劇場だらうか學校だらうが、寺でも宮でも、一人で何でもできると思ってゐるやうだし、又事實三面六臂何でも御座れの腕利きもたまにはゐるが、まあ多くはさうはいかない。中でも日本の堂宮の建築を專門にしてゐるものは、至極數が少ないのが普通である。だから無理もないといへば言へるかも知れないが、この雜誌を發行してゐる會には、日本建築專門の人士もたしかにゐるのに、多分さういふ人達に相談をせず、全然素人に立案させ、編輯員がたとひ一通りでも目を通せばいいのに、面倒なせゐか、夫とも立案者を過信してか、ろくに見ずに印刷して了ったものと推定する。何といっても時節柄お互に多忙なのだから、止むを得ないのかも知れないが、どう贔屓眼に見てもひどすぎる。情狀酌量の餘地は全然ない。以下一つ書きにしてみる。

最初に五月の例會は非常な盛會裡に終ったから、六月も亦一つ盛にやり度いものだ、就いては東播の靈刹國寶太山寺の見學を催す事にしたから、奮て申込

めといふ様な意味の文句があって、次に見學會開催の日時、集合所等を示してゐるが、見學の建築物に就いては

仁王門、特別保護建造物

本　堂、國寶今を去る千二百年靈龜二年建造

三重塔、常行堂外三堂、不動明王童子像外國寶多數特別開扉

とある。昔は特別保護建造物といったが、もう餘程以前に總て國寶と改稱されたのである。夫を知らなかったのかも知れないが、仁王門を特別保護建造物とし、本堂を國寶としたのはどういふ次第か。夫は先づがまんするとしても、苟も此本堂を主として見學せんとする人が、「今を去る千二百年靈龜二年建造」と麗麗しく書いてゐるのは餘りといへはひどすぎる。多少なりとも古建築に關心をもってゐるならば、この本堂が鎌倉時代の様式をもってゐる位の事は知ってゐる筈である。知らなければ此頃の事だから、書いたものはいくらもある。夫を見れば直に判るのである。

其後の方に「見學地概説」といふ項目があり、そのうちにいろいろ説明がしてあるが

○本　堂　……藤原鎌足公祈願に基き長男定惠和尚開基四十一支坊ありし所、御堂造丸柱桝型組立内外共薩摩杉

○常行堂　御堂内は組天井國寶阿彌陀如來安置

○仁王門　本堂と同年建築大和造入妻松白木造桝型仕組の古代式

○觀世音の大塔　寛永年中構造と云ふ入妻造十二本柱白木造

といふのが眼についた。先づ本堂の解説中、「御堂造」といふのは、どの様な造り方か、今手許にあるあらゆる辭書を繙いてみても、見出せなかった。寺傳によるに太山寺は靈龜二年の草創、開基藤原宇合、開山定惠とあるのを、簡單化して本堂の建築を靈龜二年としたらしい。其頃假に建築されたとしたら、もっと横に長く奥行は短く、つまりもっと遙に長方形をなしてゐたであらう。屋

根も現在の様に入母屋ではなく、恐らく四注であったものと思はれる。この位の大きな堂になれば、柱は斷らないでも殆んどきまって圓いし、又餘程特殊の例でないと、柱上にはこれも先づきまって科栱が用ひてあるのだから、「桝型組立」といふ事を記さないでもよからう。拙者の極めて貧弱なる見聞では社寺の國寶建築のうち、堂塔で科栱が一つも用ひてないのは、談山神社十三重塔位のものである。

更に「内外共薩摩杉」とあるのは、少なくとも柱の大部分は、杉材である事は確かな様である。傳説によると、今の本堂を建立するとき、世話方の何とかいふ人が（屋久嶋から）薩摩杉を船に積み、明石浦にある江井ヶ嶋といふのへ船をつけ、そこから揚陸して運んだといふ記錄があるのかどうか知らないが、住職はさういってゐた。「太山寺案内記」といふ小冊子に、本堂といふ題で

…是れ卽靈龜二年の建築にして今を去る一千二百餘年前とす、創立以來更に回禄の災に罹らず、以て今日に及ぶ、其の構造は御堂造り丸柱桝形組立にて、内外共總て薩摩杉の白木造とす…

とあるが、前記の本堂略解は、これを其儘轉載したものらしい。

柱は總計五十二本、夫に床板が全部薩摩杉だといふ話だが、彌須壇の邊は殆んど薄暗くて何も判らず、床板はとにかく、柱のうちの少なくとも一部は、確かに杉であるが、勿論薩摩杉かどうか私は知らない。

遠慮なしにいふと、寧ろ鐵道省の【日本案内記】（近畿編下）の文句でも寫しておいた方がよかったらう。夫には

七間六面、單層、屋根入母屋造、本瓦葺の建築で高き石壇上に建ってゐる。規模宏壯、木割雄大にして鎌倉時代の手法形式を存してゐる。

とあり、さすがに「靈龜二年の建築」だの「御堂造」だのとは書いてない。拙者實は今を距る――忘れて了ったが約――十五六年前に、二三の人と折角參詣したところ、丁度其日は一年一度の會式かなんかある日で、本堂内は一ぱいの

人、線香の煙で濛濛――香煙縷縷どこの騒ではなかった――として咫尺を辨せず、止むを得ず其儘引返してきた。最近にも僅か二時間ばかり此寺にゐた事があったが、本堂は隨所よく時代の様式を現はしてゐる様に思はれた。須彌壇の飾金具は、何れも立派なもの。又木鼻に獨創的意匠がでてゐた。

次は常行堂の記事だが、同案内記に

創立沿革詳かならず、現今の建物は享保五年の再興に係る、其構造は御拜流の御堂造り内は組天井にして……國寶阿彌陀如來を安置す。

といふのからとったらしいが、さすがに「御拜流」はやめてある。此建築には向拜がついてゐるので、夫を御拜流といったものらしい。「組天井」といふのは、「組入天井」の事をさういふ人もあるから、或はその事かと思ったところ、「格天井」であった。本堂の天井こそ内外陣共鎌倉式の堂堂たる組入天井であるのに、其事は何も書かないで、常行堂内陣中央の格天井を組天井などといふいい加減な名をつけて記してあるのを、夫をまた無條件で轉載してゐるのだから、洵に天下は泰平である。

其次は仁王門。本堂と同年建築としたのは、これも靈龜二年にされてしまったわけ、大讓歩をしたところで鎌倉時代だが、これは室町といふ事に一致してゐる様である。夫は夫としておいて、其次の「大和造入妻」は何の事か判らない。「大和造」といふ造り方の存在するや否やを調べてみたが、好結果を得なかった。「入妻」といふのも同様判明しなかった。或は妻が内方に入ってゐるから入妻としたのかも知れない。「松白木造」とある其材料の松は、時には松材がなくもない。柱等も松らしいのもあるが、さうでないと思はれるのもあり、よく判らない。夫でこのまま敬意を表しておくとして、全體が白木（素色）であったかどうか、時に丹色が殘ってゐるところも確かにある。さうして又しても桝型仕組とあるが、これもいるまい。「桝形仕組の古代式」は少しひど過ぎ

はしないだらうか。

「三間一戸入母屋造本瓦葺の八脚門、科栱三科、室町時代の建築」と、これで充分であらう。序ながら記しておくが、ある書物に

細部の手法に唐様の性質を備へ……

とある。其書物の挿繪は小さく朦朧としてはゐるが、一見したのでは唐様の性質は見當らない。否寧ろ實物を觀察すればする程和様が濃厚で、板蟇股等も室町式が用ひてある。ただ頭貫の鼻が柱から出て、簡單な木鼻をつくってゐる様に見えるだけで、間科束もあるし、肘木も亦和様である。遠慮なくいへば、よくもマアこの様な和様の未完成建築、而も相當に手の入ったものが、明治三十四年頃に、早く國寶（當時は特別保護建造物といったが）に編入されたものだと思はざるを得ない。この修理に關係する技師も技術員も隨分苦心をする事であらう。拙者は今の所責任を以て此門の修理を引受る自信はない。

本堂に就いても、同書に

……其の立圖に於ても唐様の建築に屬するものなること一見明らかなり、内部所用の科栱繫虹梁の手法形式、外部頭貫の木鼻唐戸の形式等は、共に明らかに唐様の精神を發揮し、鎌倉時代の手法形式を存せり。

とあるが、同じ位はっきりしない寫眞圖によると、正面七間に吊込んである桟唐戸は、如何にも唐様系統たる事は確かであるが、全體としては椽があり擬寶珠勾欄があり、切目長押・二重長押　上長押も間科束もあり、化粧棰も普通の繁棰である。してみるとこれは、反對に「主として和様の建築に屬するものなること一見明らかなり」である。「主として」としたのは大分遠慮したので、もう鎌倉末になれば――ならなくとも――木鼻をつけたり桟唐戸を用ひたりする位、當然のことと見られる。斯様なものは最早唐様等とは言はない方がいい。正面の桟唐戸も、割合に形はいいが、餘りにも薄過る藁座と共に後補かも知れ

ない。但し側面には立派な幣軸をもった板唐戸が吊込んである。鎌倉のものか、或は後の取替材かも知れぬが、殆んど一見しても再見しても和様と見えるなかに、飛簷隅木の鼻が下を向いてゐるところだけは、誰が何といっても「明らかに唐様の精神を發揮し」てゐる事は確かである。

尙ほ肘木は、不退寺（奈良市法蓮町）多寶塔程ではないが、うっかり見てゐると唐様ではないかと思はれる様なものであるが、中には下端と木口と區別のつかない、純唐様といはなければならないのもある。其他内部に於いては、組入天井の折上の部に蛇腹支輪が用ひられてあったり、純然たる和様の須彌壇があったり、虹梁の袖切とか眉とか、木鼻とか、左様なものは全く問題にならない。他日機會があったらゆっくり調べてみて、又愚見を述べる折があるかも知れない。

故に、結論としては、仁王門も本堂も、鎌倉・室町時代の和様——夫には當然唐様の細部はある程度迄は入り込んでゐる——建築と見るべきである。

最後に「觀世音の大塔」は、拙者は江戸時代であったといふ記憶しかなく、初重の連子なんかとても拙劣極るもので、連子子が額縁の外へはみ出してゐた。寛永ではもっとうまくなければならない、といふ規則は別にないのだから、これは先づ當分預りとして、又しても「入妻造」はどういふ次第か。門の「入妻」は入母屋として何とか筋道はたつが、塔の入妻とはどの様な形か。「十二本柱」は洵に御叮嚀で、塔は普通方三間にきまったものだから、側柱はいやでも十二本となる。初重に裳層のある場合、其柱は二十本となる。法隆寺五重塔の様に、第五重目が二間だとそこは八本になる。さう考へると「十二本柱」と斷った理由も成立つが、そんな幼稚な言ひ現はしをしないでも、「方三間」とした方がよからう。

方三間三重塔婆、素木造

なら、遙に簡單でよろしからう。

尙ほ終りに堂名を列記してある中に「釣鐘堂」といふのがある。「釣」は「ツル」・「ブラサゲル」だから、敢て「吊」字でなくてもいいのだらう、併し「鐘」をさげてあるのは樓で、堂ではない。故に通俗的には釣鐘堂でもよろしいが、「鐘樓」といった方がよからう。廚子内に安置してある佛像を「開扉閲覽に供す」とあるのもどうかと思ふ。閲覽といふと圖書館へ行って書物をしらべる樣である。佛さんや不動さんや毘沙門さんを閲覽するなんか、餘りきいた事がない。シラベルでは當らないのみならず勿體ない。これは「拜む」でなければなるまい。「禮拜」としたら難がなかったらうに、惜しい事をしたものだ。

この樣な案内記を色紙へ刷り、平氣で卷頭へ掲げてゐるのだから、どうも恐入るのである。そこいらのいかさま雜誌なら、或はゆるされもしようが、多士濟濟、立派な會員を有し、名聲天下を風靡せる專門雜誌が此有樣では、洵に氣のどく千萬な次第と申すべきである。これといふのも素人の書いたらしい案内記が祟りをなしたのである。其案内記の編輯兼發行の名義人は住職だが、住職は建築に關しては素人だから、何れ誰か起稿した人があるのだらう。その素人らしい人の書いた案内記を、殆んど其儘專門雜誌の見學案内に轉載してゐるのがいけない、第一まるで素人の集りみた樣でみっともない。

（昭和十八年七月三十日稿了（追加））

昆蟲採集漫談

（昭和十三年九月發行雜誌【文藝春秋】登載の隨筆を增補したもの）

去る昭和十三年七月、文藝春秋社から、其年の九月號に登載するのだから、何か隨筆一篇を送れといふ手紙が來た。勿論原稿の長さに制限があったし、日限も七月末日といふ事なので、子供の時から趣味をもち、今でも持ってゐる昆蟲採集に就いて、原稿紙のゆるす範圍で「昆蟲採集漫談」といふのを書いて送った。併しそれには書いておかうと思った事を大分省略したので、此度は重に鱗翅目の昆蟲のことを記さうと思ひ、主としてその方面で增補し、【成蟲樓隨筆】の最後にのせておくことにした。讀者にとってはつまらないかも知れないが、小生には樂しい想ひ出の一つである。つまらないと思ふ諸君は、どうか讀まずにおいて戴き度い。

近年は昆蟲の趣味が普及したから、夏になると百貨店等には採集用具や美しい標本等を陳列してあり、而も割合に安價だから、捕蟲網と採集箱位を入手すれば、直にでも蟲を追掛られる。其上に大小精粗各種の參考書もあって、捕った蟲の所屬も和名も學名も、夫さへ見れば容易に知れるから、子供達はさぞ面白いだらうと思はれる。日曜日や夏休み等には、中學校や國民學校の先生が生徒のなかの希望者を採集のため近郊へ連れて行ってくださるから、この樣に都合のいい事はめったにない。

ところが私共の子供の時分は、今から半世紀以上も前だから當然であらうが、採集網等といふものはまるでなく、笊に手頃の竹の棒を通したもので蝶や蜻蛉を伏せ、捕ったものは蟲籠に入れておき、死ねば捨てるだけのことであった。然るに或日父は本式の標本を二箱もってきてくれた。これは父の知人の弟が製作したものださうで、當時では洵に天下の珍品であったに違ひない。これは私が七歳の時であったさうだが、此意外なみやげが大變にうれしかったと同時に、斯樣にすれば蟲をいつ迄もとっておく事ができると敎へられたが、何分にも子供で標本のつくり方もわからず、父も勿論知らなかったので、折角の箱入標本も自然に壞れて了った。實際私が展翅板といふものを知り、其溝のなかにはコ

ルクを敷き、紙で翅をおさへて乾燥標本をつくる事や、腹綿の多い蟲は夫を引出して乾燥させなければ、腐敗して駄目になることを知ったのは、中學の上級生になった位の時で、そんな事は誰も敎へてくれなかった。

父が標本を貰ってきてくれた其標本をつくった人といふのは、私が中學を卒業する頃　高等商業學校（東京神田、今の商科大學）の生徒であったから、私よりせいぜい多くて四つか五つ年上であったらう、さうすると私が七歳なら十一か十二位とすると、そんな標本がよくできたものだ。さうして其製作法をどうして知ってゐたらう。今から考へてみると、其人の兄さんといふのが、とうに亡くなったが今生存してゐれば八十歳位であらうか。長期英國に留學して機械工學か何か修めて歸って來た、當時では我國の帝國大學（勿論東京に唯一つの大學であったから、ただ帝國大學といってゐた）卒業生なんか、足元へもよりつけない位の最新知識の持主であったらうから、昆蟲標本製作の方法なんかも知ってゐて、この兄さんが半分以上手傳ったのかも知れないと思はれる。この人を父は知ってゐたのであるが、夫は父の上役で、知ってゐるといっても大分段が異ってゐたらしく、卒直にいふと、御下渡の標本を貰って來たものらしいのである。

何でも九歳から十一歳位迄、埼玉・群馬あたりに住んでゐた。埼玉縣では兒玉郡の本庄町にゐたが、これは僅に半歳位であったらしく、間もなく今の高崎市（其頃は高崎驛といったらしい）に引越した。ここで初めての夏に、私は珍らしい蜻蛉をみた。此時迄は翅を背で合せて靜止するのはイトトンボ（東京方名トースミトンボ、これはトーシントンボ（燈心蜻蛉）の訛り。今ではそんな名はなくなったらうが。）と呼ぶ小型のものばかりと思ってゐたのに、大きな翅の透明なのだの（ヤナギトンボ）、赤褐色のだの（カハトンボ）、黑色なのだの（ハグロトンボ）、而もからだは綠色に光ってゐたり、白い粉がふいてゐたり、どうも美しいとも何とも形容のしようのないのが澤山にゐた。蟬の子供が地中生活をし、土から出て來て親になる事を初めて敎へられ、地面から這出してきたツクツクボウシの仔蟲を籠

に入れて成蟲にしたり、ヒオドシテフの幼蟲が家の内に入って來て天井からぶら下って蛹になったのを見たのも、何れも高崎の町に住んでゐた時で、此方面では大分新知識が幸に頭の内に入り込んだのである。

夫から東京へ歸って僅かゐて、今度はまたもや十二歳の一月、栃木縣の宇都宮市へ引移り、其翌年の春には復東京へ歸った。だから宇都宮へ住んでゐたのは僅かに一年であったが、この年は恐らく私の子供時代を通じ、最も樂しく嬉しく暮したと思ふ。山へ貝の化石――これは其昔、獨逸國はウェルツブルグ大學のベリンガー教授が發掘したやうな僞物ではない、正眞正味の斧足類の化石――をほりに行ったり、川へ八つ目鰻を捕りに行ったり、蟲を追ひまはしたり、そんな事ばかり專門に遊んでゐて、學校なんかはほったらかしておいたから、學年の終りの考査（其頃は大試驗といった）には辛ふじて最後の席順で進級するの光榮に浴したが、身體は大分健康になったらしい。

庭の後方の片引戸をあけて出ると、そこには漢木が生えて居り、三種類のハゴロモ（透翅、青翅、鼈甲羽衣）を初めてみた。夫から何ともいへない樣な小さい赤いとんぼがゐた。非常に多くて、いくらでもそこいらにゐた。どうしてこの樣に小さいのだらう、今にもっと大きくなるかも知れないと思ったりした。蟬の幼蟲が地中生活をするのは既に知ってゐたが、蜻蛉の子供が水に住んでゐることは知らなかった。其極めて小型であることが珍らしくて仕方がなく、どうかして保存したく思ったが、まだ展翅板といふものの知識がないので、太い留針で勇敢に胸を刺しておいた。幸なことに腐るだけの腹綿がないためか、乾燥標本になるにはなったけれども、四枚の翅は勝手な方向をとり、始末にわるいものになった。父も餘り小型であるのに興味をもったか、小さい紙箱の蓋の縁を少し殘してきり、硝子を嵌めて上から見える樣にし、身の底に樟腦を敷いて綿を入れ、其上にこの蜻蛉を五つ並べて蓋をしてくれたのを、大切にしてゐるうちに、全

部蟲に食はれて終りを告げた。この極く小さい赤とんぼは名古屋市に近い八丁畷といふところに多産するためハッチャウトンボの和名で知られてゐるが、その名のつかないうちに、こちらの産地が知れてゐたら、トチギトンボとかウツノミヤトンボといふ名になってゐたかも知れない。

其頃町から鐵道線路を横切って少し行った邊に、栗や櫟の叢生した小地帶があり、そこを栗山と呼んでゐた。この栗山（實は山でも何でもなく、平地に木が生えてゐただけだが）のうちのある木が、葉を全部喰はれて、枯れた樣になってゐたものの枝といふ枝に、緋縅蝶の蛹が鈴生りに、夫は何と形容したらいいか判らない位にぶら下ってゐて、中にはぬけ出して親になったのや、なりかけたのや、全體で何百あったか、何千あったか、實に美事な有樣で、今なら何を措いても先づ寫眞をとったであらう。大正十一年の春、私は伯林市の昆蟲館か何かで、屋外は零下何度の寒さで、外套の兩方の隱しに入れた懷爐を握って漸く手先の氷るのを防いでゐる樣な際に、大きな硝子箱のうちに鬱蒼と茂った樹の葉の間から、無數のコノハムシが、ぶら下ってゐるのを見た時、第一に思ひ出したのは、三十五年前の栗山のヒヲドシテフの蛹であった。こんな光景は恐らく昆蟲學者でも幼蟲を飼育しない以上、天然のは餘り見てゐないだらうと思ふ。

栗山へ行くみちで、キバネツノトンボの飛んでゐるのを初めてみた。短い草が一面に生えてゐる野原の、地面から二三尺の高さの邊を一直線にのろい速力で飛ぶが、太い長い二本の觸角と、まっ黑な毛むくじゃらの胴體と、黑と黃色との斑紋のある後翅とが、大變に目立った。捕へてみたら甚だきみの惡い蟲なので、捨てた覺えがある。

其頃は豆の樣な形をしてゐる樣に思ったので、豆蟲といふ名をつけておいた小動物、後になって故石川千代松博士が動物學雜誌か何かに多くの圖を入れて

書かれた（と記憶するが誤ってゐるかも知れない）論文により、夫はやはり甲殻類である事を知ったが、カヒエビ（ヒメカヒエビであったかも知れない。大さは今はっきりした記憶がない。）が近所の小さい沼の様な水溜りに澤山泳いでゐたのを見た。ホウネンウオは高崎でたった一度一疋みた事があったが、これ等は後にも先にも、一度だけで其後はつい出會はない。

明治二十四年から六年にかけて、東京市芝區汐止町に住んでゐた。當時は銀座の岩谷商會（天狗煙草で有名であった）の前と、土橋の江木本店（寫眞師）の角と、夫からあと二所位に毎夜アーク燈がついてゐた。アーク燈は夜間採集の好適の場所で、殊に蛾類は時によると逸品――今で見れば珍らしくも何ともない種類だが――を手に入れることができたので、夏の夜はよく出かけたものだ。其頃中學の同級生にT*といふのがゐた。伊豫今治（イマバリ）在の人であったが、銀座におぢさんが何かの商店をもってゐたので、その家の二階に納ってゐた。やはり蟲をとって針で刺して喜んでゐた。ところが事情があって退學して歸國する事になった時、自分のもってゐた標本を全部私にくれて行った。多く蛾類であったが、そのうちに枯葉蛾の雌雄があった。展翅がしてないので、獨特の形をしてゐるのを以前から氣がついてゐて、實は欲しくて仕方がなかった。ところが岩谷商會前の電燈で漸く捕へたのだからとて、中中くれなかったのに、今度は惜し氣もなく無條件で讓ってくれたので、隨分うれしかったのは、今でも忘れない。

網の深さ等も適當の寸法がある事を知らないから、いい加減に勝手にしてゐ

* 月岡文藏といふ人。當時の宿所の控に、愛媛縣周布郡多賀村大字北條二百八十五番戸とある。今周布郡といふのがあるかどうか知らない、周桑郡といってゐる樣である。同君は後京都市室町通り下長者町邊に住し、南畫家となり、號を栖霞といった。先年物故され盧山寺に葬った。私が京都市に住する樣になってから數回往復舊交をあたためたが、讀者のうちに御存知の方もおありかも知れないと思って、これだけのことをかいておいたのである。栖霞先生も中學の三年生位の時は電燈の下で蛾の採集をしたことは、恐らく京都ではどなたも御存知あるまい。

たし、古い破れた蚊帳の麻をつぎ合はしたもので、夫も母親に賴んで漸く貰ひうけて、つくって貰って得意になって振り廻してゐたが、この頃になって銀座の何とかいふ家で、白い龜甲紗を賣ってゐる事を知り、綠色の染粉を一緒に買って來て、自分で染め上げてそこいら中を綠にしたり、採集網の柄は繫竿が便利だと判って釣竿屋に註文して、適當なものを造らせただけでは滿足ができず、序に採集箱もほしくなったので、桐で工合のいいのを造って貰ひ、其底へは最初新しい疊表を敷いたが、仲間がコルク板を敷いてゐるのを見て、疊がいやになり、芝から柳原迄コルク板の屑を買ひに行って、疊の代りに敷詰めて一先づ滿足をした。これだけ大袈裟になってくると、針も普通のでは氣に入らず、銀座通りの京橋に近いみす屋に英國製のものを賣って居り、一本五厘で百本の五十錢、一號から六號迄、長さは同じだが太い細いがあるから、皆揃へたくなり、五十本づつ六種で參圓、これも亦苦心の結果買って貰ふことに成功をした。

當時は勿論展翅板も知ってゐたが、桐で造らせるだけの智慧はなく、檜でつくり溝にはコルクをつめた。溝の幅さもさう廣くしてなかったから、大型のスズメガは胴體がうまく溝に入らず、溝の廣いのと狹いのと二種あればいいにきまってゐるが、さう多くは造らしてくれず、いい加減苦心をしたものだ。夫でもやっと展翅をして掛けておくと、そこへ他の蟲が飛んで來て卵を生みつけるから折角の標本ができ上る時分には、さんざんに喰ひあらされて駄目になって了って、なさけない思ひをした事は何度あったか知れない。其時の展翅板がどうした次第か、たった一枚殘ってゐた。最近東京の家を整理した時見つけ、今京都へもってきてある。

中學の四年から卒業する迄には、あの時分には珍らしい蟲を大分に捕る事ができた。箱根の塔の澤で、草の葉の裏にアヲバセセリが三疋とまってゐた（箱根地方

は特に多いと何かにかいてあった）のを一網に抄ひ捕ったことや、宿屋の電燈に夜間オホトモエが飛來したのを大騒をして捕へたり、水戸市の在に住んでゐた友人をたづねて行く時初めてヒメシロテフを得た事、東京近郊ではアカシジミ二種、ミドリシジミ、コツバメ等に初めてお目にかかった事等、何れも樂しい想ひ出である。

昆蟲がいろいろに分類されてゐる事を知ったのも此時分であったが、さういふものを調べる書物が全然なく、從って判らなかった。但し蝶類だけは上野の圖書館に「ローパロセラ・ニホニカ」があるときき、初めて借りて見た時、從來まるで知らなかったことが、總て一時に判った樣な氣がして、其喜びは大したものであった。のみならず其種類の多いのにも一驚を喫した。今なら其方面に多少の趣味をもってゐさへすれば、原色版の美しい圖版入の參考書は少額の金で容易に得られるから、國民學校の兒童でさへも知ってゐる樣な事を、中學を出た頃初めて知り得たのだから、程度は知れたものである。こんなところが漸く深入をして、一時は相當の數を集め得たが、もうとうの昔に標本は勿論、箱まで皆壞れてしまった。

其中で私が最も惜しいのはアマゾン河流域に產するモルフォ屬の標本である。標本といっても實は四枚の翅だけである。もう十四五年にもならうが、これは友人のN君から戴いたので、完全で少しの缺損もなく、鱗粉もとれてゐない頗る上等のもの。N君の知人がブラジルに長い間住んでゐて、此度蝶の翅四枚づつ二種、手紙と一緒に送って來たが、自分は興味をもたないから、君が入用ならあげるとの事であった。一種の方は小型で前翅の一が半位しかなく、他も不完全であったが、大型の方はまぎれもないモルフォで、美しい金屬性の光澤は、或は濃藍に或は紫に、垂涎萬丈ものであった。而も夫はモルフォ・アマゾンテ

だといふ事が殆んど確かだったから、喜んで頂戴に及び、早速額縁を買って來て、其中央へ唯一疋、農學部のYさんから書物を借り、先づ胴體を描いて彩色を施し、甚だ注意をして肩板を少しく切り、其下へ前翅のつけ根を入れ、額にしたのである。少しく怪しいのは胴體の色で、あとは正眞正味の四翅が異彩を放ち、一方ならず滿足して悅に入ったものだ。翅だけだから蟲に喰はれる心配はなし、かう見えてもモルフォを所有してゐるものはさうザラにはあるまい位で、大に納まってゐた。

光線が强くあたらない樣に注意をしたから、いつ迄も美しかった。ところが不圖氣がついたら右の前翅の翅脈を、どうしたものか蟲に食ひ荒されたと見え、何ともなさけない狀態となり、最早到底如何に繪の具でごまかしても、何ともならない迄になって了った。よく見たら頭の黑い長さ三分位の細い裸蟲が、硝子と翅をはりつけた紙との間にゐて、尙ほ盛に喰害しつつあった。洵にどうも驚いたもので、親があんな所へ入って卵を產むことは思ひもよらないから、いづれ何かの幼蟲が潛入したと見るべきであらうが、かくして私の珍藏にかかる珍蝶の標本は、無名の裸蟲にひどい目に遇はされてしまったのである。

「ローパロセラ・ニホニカ」は全三冊、一冊四圓で合計十二圓。明治二十年代の中學生にとっては手の出し樣のない大金である。而も既に第一第二卷は絕版で、第三卷だけ日本橋の丸善で賣ってゐる事を知り、一生懸命で父に嘆願し、やっとの事で買ふ事ができた。ところが其時をさる約三十年、昭和十年八月に五百部限定の翻刻ができた。世に出た時分私は不在であったが、翌年五月に歸朝して直に申込んだら218番の書物が屆いた。價僅に七圓、まるで嘘の樣な安價で入手したが、今私の貧弱な書庫の中で異彩を放ってゐる。宮嶋博士の【日本蝶類圖說】と共に、最も大切な書物のうちに入れてある。

蝶の方はこの様にして、分類も覺えたし名も判ったが、蛾ときては全然駄目であった。オホスカシバを初めて捕へたのも其頃であったが、勿論美しいのと珍らしいので夢中になった位の事で、名の判る筈がなく、夫を判らせるため上野の帝室博物館へ行ったものだ。天産部に標本にしてあるうちに、ことによったら同じものがあるかも知れないといふ量見からであった。

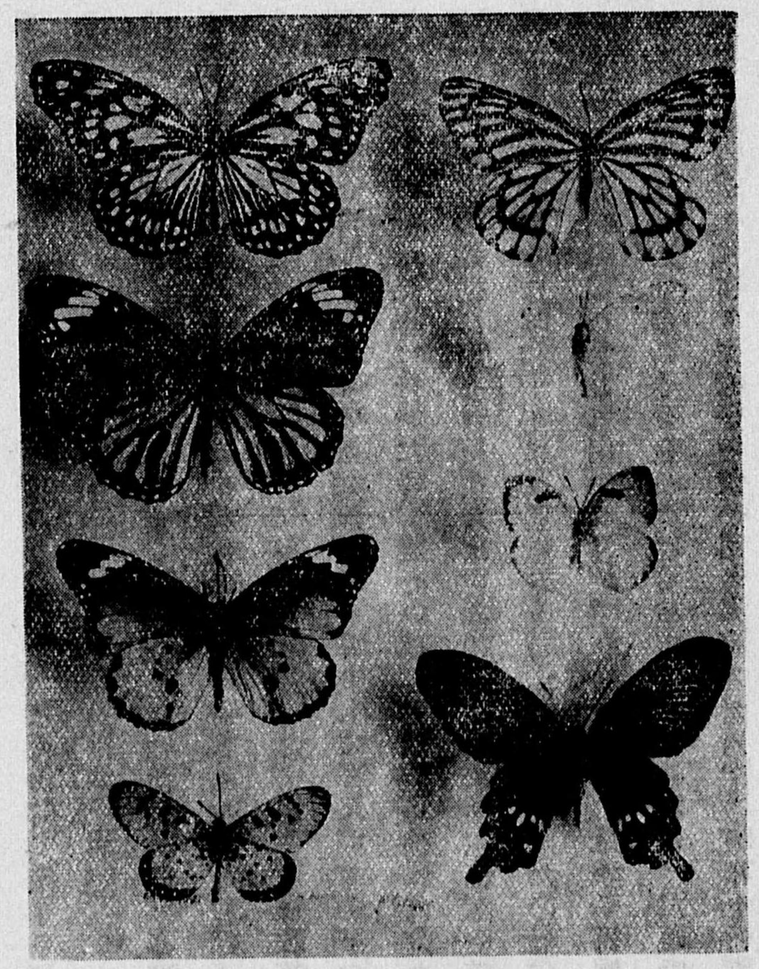
早速蛾の部を見たら、あるにはあったが名はかいてなかった。それからはっきり記憶しないが、今度は圖書館へ行って英語の昆蟲書を借りて見たと思ってゐる。さうしたらあったが、夫には Hylas bee hawk moth といふ名が書いてあり、學名は Sesia hylas とあった。これは昔の手帳に書いておいたので、隨分探したが、何分半世紀以前のので、つい探し出さなかったから、少し間違ってゐるかも知れない。とにかく蜂の様で其美しい事は希臘神話中の美青年ハイラスの名を冠しても恥かしくない位、日本で「スズメガ」(雀蛾)といってゐるのを、あちらで鷹にたとへて鷹蛾といふ。今になって辭書と首っ引で感心してゐるが、其頃は何だか知らずに、語呂で覺えて夫が頭の中にこびりついてゐたのである。昔の學名のセシアは、當時はセッサイデーに屬してゐたからだらうが、どこ迄も美しいハイラスの名を種名にしたのであらう。

其頃和名にオホスカシバといふ名がつけられてゐたか、其他此仲間のスキバホージャク(透翅鳳雀)、クロホージャク、ヒメホージャク等、總て名がついてゐたか、さういふ事は一切知らないが、何にしろ一つ蟲を捕へると、其所屬や名を調べるのが容易ではなかった。だから曲りなりにも類似品が見つかると隨分うれしかった。オホスカシバにせよ、長い間ハイラス・ビー　ホーク　モッスでとほしてゐた。

後にも先にも仙臺市の廣瀬川の向ふの山の雜木林のなかで、唯一度アゲハモ

ドキを捕へた時、隨分珍らしく思って早速動物の先生に觀て頂いたら、先生も御存知がなかったと見え、「ジャコウアゲハに似てゐるな、これは食へるか知らん」と仰しやった。食へるかは少し恐入ったが、これは人間が食ふのではないことに後に氣がつき、苦笑した事をはっきり覺えてゐる。

福嶋縣の山の中でギフテフ（大變に小型であったから或は「ヒメギフテフ」かも知れない）を帽子で伏せたり、仙臺市の郊外で逆に下がってゐる毛蟲を枝ごと取って來ておいたら翌日蛹となり、遂にクジャクテフが出たり、明治の末年には高知市の近郊でモンキアゲハを帽子で伏せそくなったり、大正の初めには大分縣は別府溫泉の近郊でイシガキテフを麥稈帽ですくひとったり、コノマテフを中折で伏せたり、昭和の初めには庭園と茶室とで有名な苔寺の庫裏の長押にとまったオホムラサキの雄を手づかみにしたり、夫相當の樂しい記憶がある。讀者諸君、いい年をして子供らしい



九九. サンチ丘上にて採集した蝶類八種。
大正十一年十二月二日・三日に亙り、サンチのD.B.に滯在し、丘上の廢墟を見學した時、その邊にゐた蝶を帽子で伏せて持歸り、標本にしたものの一部。大概は琉球・臺灣等にも分布してゐる種類である。もうとうの昔にこわれて了ひ、今は一つもない。

と笑ひ給ふ勿れ、その道へ入ってみなければ、はたから其樂しさは判らない。

大正十年から十一年にかけて印度を歩いたときには、琉球　臺灣あたり迄出かけなくては、見る事もできない樣なのがいくらもゐたので、冠ってゐたヘルメット帽で伏せて少しばかりもって歸って來た。誰もあまり蝶蝶等を追ひかけないと見え、早いと思はれる種類迄がゆっくりしてゐた。ボーパル州サンチ丘のあの有名な佛塔見學に行った時、美しい標本を幾つか捕へた（**九九**）。萬一幸にして再游の好期に惠まれたならば、其時は捕蟲網を忘れない樣にしようと決心をした。然るに昭和十年には偶然さういふ都合になったので、用意萬端ぬかりなく、三角紙迄用意して出かけたが、今度は專門の見學や寫眞とりがいそがしく、蝶蝶蜻蛉や蟊斯等を追ひかけてゐる事ができなかったので、折角の特製捕蟲網はお供になり、帽子で伏せたオナシアゲハ――昭和十一年の一月三日、セイロン嶋のポロンナルワの遺跡見學の際、一時に羽化したものと見え、美しい上等の標本を容易に獲た――の雌雄がおみやげになった位であった。マドラス市から左程離れてはゐない昔の建志補羅（建志城）、卽今のコンジーベラムの公立宿舍の庭でメスアカムラサキの雄を見つけ、どうかして捕へようとしたが、遂に逃げられて了ったのは、今でも殘念でならない。

この第二回の印度旅行の時、マドラス市に於ける宿は、當時の三井物產支店長の社宅であった。勿論此時迄一面の識もなかった岩見支店長に、さる人の紹介で行ってお世話になったのだが、ある夜（昭和十年十二月二十二日）電燈に何か知らん大きな甲蟲が飛んで來た。落着いたところで捕へてみたら、頭の上に短い一本の角を有するタイワンカブトムシであった。名の上には產地の臺灣がつくが、元來此甲蟲は印度各地に普通だし、日本では外地なる朝鮮や琉球にもゐる奴である。學名は Oryctes rhinoceros と書物にある。うまい名をつけたものである。角が

一本鼻の上から生えてゐるから、夫は確かにライノを思はせる。尤も犀には二本角と一本角と二種あり、ビコルニスとウニコルニスといふ名がつけてあるから、さういへば我國のカブトムシだってビコルニスな筈である。併しこの一本角の甲蟲は、夫は實に犀を聯想せしむるに適した形態をしてゐる。とにかく私は初めて生きた標本をみたので、直に捕へたが入れものがない。クロロホルムの様な注射藥もなし、仕方がないから生きたまま616のコダック・フヰルムの空箱へ入れた。元より錫で覆ふた丈夫な紙の筒の中へ入れたものを更に圍りの四角な紙箱へ入れた上に、紐で結へておいた。まあかうしておけば、二日もたてばさすがのライノも安樂國に往生するだらうといふ考へであった。

十二月二十三日にはマドラスをたってママラプラムへ行き、前以て交渉がしてあったから、同所の公立宿舍を借切り、ライノセロスは入れものごと机の引出しへ入れておいた。夜になってから引出しをあけてみたら、入れものは寸斷されてゐて蟲はゐない。尤も引出しは奥までないから後ろの方はあいてゐる、其すきからうまく脫出はしたが、部屋の外へは出られないから、きっと室内にゐるだらうといふ見當をつけてさがしたら、反對の壁際にゐた。こいつは甚だ手に負へないから、今度は三笠懷爐の平圓盤型の灰のあき罐に密閉し、蓋も可なりかたいから大概よからうといふつもりで、其まま机の引出しへ入れておいたら、蓋を押しあけて再び脫出した。其力量のすぐれたのに私は感心し、一夜罐内に監禁——これがほんとうの罐詰だが——して翌二十四日に逃がしてやった。ママラプラムのダク・バンガローの庭の大樹の幹にとまらせてやった。おそろしく頑丈な蟲がゐるものだと、大に感心をした。

マドラスの三井支店長の社宅の一室で捕蟲網を見た。子供がゐないのに不思議だから、夫人に伺ひを立てたら、意外も意外、御主人卽ちいいお年の支店長

殿が蟲を追かけるのだとあった。そこでこりゃあ話せると思ったから、御主人の歸宿を待って昆蟲採集の話を持出し、大に肝膽相照らしたが、此時岩見さんが若い時にシジミテフの新種發見のお話を承った。

夫は何でも明治三十八年か九年頃とかで、東京近郊（今は市内かも知れない）の淺川から五日市へ行く途のあたり、偶ま捕へたシジミテフが少しく見所があるとかで、松村松年博士へ送って鑑定を求めたら、「ヘリホシジミ」學名 Taraka harae と命名された。新種の發見なんで全く偶然なものだとあった。Taraka といふ名をもってゐるのは、私の知ってゐるのではゴイシシジミの Taraka hamada 位のもので、harae と hamada とよく似てゐるが、どの様なシジミか。*ヘリホシなら見當がつく。ゴイシシジミの碁石が緣に整理された種類だらう位に考へられるが、「ヘリホ」では何か判らない。發見者に敬意を表し、和名を「イワミシジミ」とし、學名を Taraka iwamii とか iwamiensis とでもしたら、發見者の名譽を永久に殘すのに、何だか氣の毒の様な惜しい様な氣がするが、かういふ事は素人の考へる様にはならないと見える。

（昭和十八年三月二十一日稿）

＊ヘリホシシジミといふのは沖縄特産のもので、同地には「普通のシジミなれども本邦内他部には產せず」と【日本蝶類圖說】にある。學名 Lycaena beroe Felder ださうで、本邦產蝶類中最小ださうな。現今では和名も學名もこの通りかどうか、その邊は知らないが、恐らく當時は其名で呼ばれてゐたのであらう。だからヘリホシでは既に先輩があるから、同名ではいけないであらう。併しイワミシジミならいい筈である。

成蟲樓隨筆　(佛)定價 三・五〇
特別行爲稅・一〇　實價 三・六〇

昭和十八年十二月十五日印刷
昭和十八年十二月二十五日發行

出版會承認い120403
初版3000部

著者　天沼俊一

發行者　臼井喜之介
京都市河原町四條北
一條書房

印刷者　堀井清
京都市烏丸通七條下西入

發行所　京都市中京區河原町四條北
有限會社 一條書房
電話本局②六八四七番
振替京都二三三〇七番
出版會一〇二五一〇番

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二

弘文社印刷所　西京22

969
73

終